

日本の農村地域に生きる中国人妻たち

近藤 功

一九八〇年代後半以降、海外から多くの外国人女性が日本の農村地域に「花嫁」として嫁いで来た。フィリピン、韓国、中国、タイ、スリランカなど多くの女性が海を渡ってきたのである。二〇〇二年の厚生労働省の人口動態調査によると、日本人男性と結婚した外国人女性たちの中で、一番多いのが中国人女性であり、その数は一万人を超えている。私は二〇〇四年より二〇〇五年にかけて、日本の東北地方のある農村地域において、結婚により来日した中国人女性（以下、中国人妻と呼ぶ）に関する異文化適応、日本語習得などの調査を行った。その中で見えてきたことは、中国人妻たちが言

語に関して多くの問題を抱えているということである。

そもそも、なぜ多くの中国人女性が母国を離れ、日本の農村地域に嫁いできたのか。インタビューで見えてきたのは、来日前に日本

に対して大きな夢、中には大きすぎる夢を抱いていた人が多いということである。彼女たちが日本に関して中国で見たり聞いたたりしたものは、近代的なビルが立ち並ぶ光景であり、ハイテク産業に関するものなど大きな夢を抱かせるような話題が多かったようだ。しかしながら、その大きな夢は、来日後、雲散霧消してしまつたというのが現実のようだ。

中国人妻たちは、どのようにし

て日本人男性と結婚し、日本語を学び始めたのであろうか。私が調査した地域に関しては、仲介業者を通して日本人男性と結婚した人たちが多い。日本人男性が中国に行き、中国人女性と見合いをする。わずか数日の間に、見合い、結婚式、新婚旅行と忙しい日々が続く。お互いの共通言語は無く、通訳を介して意志の疎通を図ることが多い。

結婚式を挙げたと言っても、日本にすぐ来られるわけではない。日本へのビザが下りるのに一〜三カ月かかる。そこでビザの下りる間、ひらがな、カタカナ、簡単な挨拶程度の日本語を習うことになる。一週間に一度か二度、一時間から二時間レッスンを受けるのみである。ほとんどの女性は日本人男性と見合いをする前には日本語など全く習ったことがない。このような状況では、嫁ぎ先で日本語を用いて会話をするにはあまりに

も時間が足りない。それでは日本人男性の中国語はと言うと、結婚当初は中国語を覚えようとして、その後はあまり覚えようとしていないことが多い。

夫婦がどのような手段で意思の疎通を図っているのかというと、それはテキストや辞書に書かれた言葉を指で指し示すか、漢字を書いて筆談するかなどである。通訳を呼べば出費が高む。意思の疎通が困難になるたびに通訳を呼ぶのは不可能である。このような怪しげなやりとりではしばしば誤解が生じ、離婚する女性、義父と夫の暴力を受ける女性、自殺に追い込まれる女性などが生まれる。そこで頼みの綱が地域の住民らボランティアで運営する「日本語ボランティア教室」の存在である。

日本語を話す必要性を感じた中国人妻は、近くの日本語ボランティア教室に通うことになる。教室では日本語を勉強するだけでは

ない。自分の母語で話すことがストレス解消になるのであろう。妻たちは、仕事のこと、育児のこと、舅・姑・夫のことなど中国語で話す。

こうした教室では『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）という初級テキストを使用することが多い。あるボランティアの人の話によると、その初級テキストを終えた後は、中・上級に進まず、日本語ボランティア教室をやめ、仕事を探し始める人が多いという。しかし、仕事を探す上で問題となるのがまたしても日本語力である。希望する会社に電話をしても、日本語があまりできないという理由で断られるケースが多いという。日本は日本語ができないと暮らしにくいところなのである。また、地方には都市部と違った日本語の必要性もある。例えば、車の運転である。交通機関があまり発達していない所では通

院、買い物、子どもの送り迎えなどの理由で車の免許を取ることは非常に重要である。そこで自動車学校に通うことになるのだが、講義は日本語、試験も日本語という場合が多く、ある程度の日本語力が必要である。日本語の習得は、中国人妻たちの前に立ちはだかる大きな壁の一つである。

* * *

中には日本語力がなかなか向上しない人もいるが、その要因として、農家に嫁いだ中国人妻たちの過酷な労働実態があり、日本語を習得する機会が奪われているということがある。日本国内の米価は低迷したままで、農業を取り巻く環境は年々厳しくなっている。インタビューの中でも農作業の過酷さを訴える人がいる。農作業は朝早くから夜遅くまで忙しく、日本語の学習にまで手が回らないというのだ。ある女性は、日本語ボラ

ンティア教室に通いたいが夫の理解がなく、来日五年目にしてやっと教室に通い始めたという。彼女は、来日当初、夫婦喧嘩をするにも日本語で言いたいことが言えず、ストレスが溜まり、夫に対してもただ泣き叫ぶだけだったと言

う。さらに、地方には、日本語の学習は標準語と言われる日本語、周りの人たちの話す会話は方言という問題がある。中国人妻たちはその違いに戸惑いを隠しきれない。周りの人たちが話している日本語をそのまま書いて、周りの人たちの笑いものになる場合がある。標準語と方言、文語的表現と口語的表現、その違いを見分けることは中国人妻にとって困難を伴うよう

だ。例えば、姑が「よざわ」と発音していたので、「よざわ」と思

い込んでいた中国人妻が、書類を書こうとして隣の上司に訊いてみたところ「よざわ」と発音するのは方言であつて、標準語では「よざわ」だったということも起きて

いる。それでは日本語をどのように学習すべきなのか。日本語をマスターしたある中国人妻の話によると、時間があれば自室にこもつて日本語のテキストで学習し、日本語のテープを何度も繰り返し聞き、わからない言葉はその都度辞書を引いたり周りの人に訊いたり、大切な文法事項はノートにまとめるとかなり長い期間努力しなければならなかつたと述べている。日本語力を向上させるには、時間と努力と高度な学習ストラテ

* * *

ジーが必要であるようだ。ある。ある女性は、子どもに中国語を教えようとして何度も中国語で話しかけたが、その子は中国語には興味がないようで、彼女いわく「返事もしない」ありさまだったので、その返事もしなかつた子どもが、母親に伴われて中国を訪れた際にそのまま母親の実家に留まり、中国の小学校に通い始めたそうである。中国語がゼロに近い子どもでも、半年も経つとかなり中国語も上手になつたとか。母親としては子どもと別れて暮らすのは辛いことであろうが、中国にいる子どもの存在が母国とのつながりを強めてくれたことであろう。

また、別の女性も家庭内で自分の子どもに中国語で話しかけている。その子どもはしっかりと中国語で答える。あまり難しい言葉はわからないようだが、簡単な中国語はほとんどわかると言う。彼女はやはり自分の母語を子どもに継

承して欲しい、できれば子どもが中国に行き、中国の学校に通って欲しいと述べている。ボーダレスになりつつある現代社会ではそれも可能であろう。

我が子に中国語を話して欲しいと望んでいる中国人妻たちは多いが、子どもたちの日本語に対してどのように考えているのか。ある中国人妻は、母親として子どもに日本語を教えてやりたいという思いから、子どもの小学校入学をきっかけに日本語ボランティア教室を立ち上げた。しかし、子どもの日本語力の伸びは目を見張るものがあり、あつと言う間に母親の日本語力を上回ってしまった。子どもの通う小学校とやりとりをする通信欄を書くのも自分の子どもであるという。母親である中国人妻たちは、日本語で話すことは何とかできて、文章を書くことを苦手とする人が多い。

このように、日本の家族との会

話、会社内での会話、近隣との会話、子どもが通っている学校とのやりとり、車の免許取得、方言など、中国人妻たちにとってはどれも重要な問題である。異文化で暮らすことは母国で暮らすよりもより一層の努力が必要であり、その多くのエネルギーは日本語習得に費やされるのである。中国人妻たちにとって日本語は重要であるが、私が期待するのは、中国人妻たちが日本語を習得できることだけではなく、彼女たちが自身の文化を発信できることである。そうすることによって、日中の相互理解を促し、われわれの暮らすこの地が誰にでも住みやすい多文化共生社会につながるであろう。

(桜美林大学大学院)